仏教語彙の日本古典文学資料による意味変化
――二字漢語を中心に――

Research on the Semantic Change of Buddhist Words by “Japanknowledge Koten Contents”:
Focus on two-character words

GUO　Tonglin

郭　　桐　琳

概　　要

古くから日本に伝播した仏教や中国の言語文化が、大きな影響を与え、現代でも広く使用されている。本稿では、辞書における二字仏教漢語を明確な基準で三つに分類した上で、「表記もよみも同じで、意味が異なる」での八つの語に焦点を当て、日本の古典文学データ資料を用い、通時的かつ計量的に語の意味的経年変化について検討した。その結果、意味の使用頻度を示すことで、時代の推移に伴い、仏教的意味から逸脱して一般的な意味への移行が観察された一方、「方便」と「結縁」が主に仏教的意味で使用され続けることが分かった。これは仏教語彙に関連する意味の研究において有益であると考える。

キーワード：二字仏教漢語、データ資料、通時的かつ計量的、使用頻度、意味変化

Abstract

Buddhism and Chinese languages and cultures, which spread to Japan from ancient times, have greatly influenced the country and continue to be widely used today. In this paper, after classifying the two-character Kanji words derived from Buddhism in the Dictionary into three categories, we focused on eight words that have “the same notation and reading but different meanings,” examining changes in the meanings of these surveyed words over time by diachronic and quantitative methods with data from “Japanknowledge Koten contents.” The results showed that the frequency of usage of meanings, it was observed that there was a shift from Buddhist meanings to more general meanings over time. At the same time, it was found that “hōben” and “ketsuen” continued to be used primarily in their Buddhist contexts. We believe that this study is beneficial for understanding the meanings related to Buddhist words.

Keywords：Two-character Buddhist Kanji words, Data material, Diachronic and Quantitative, Frequency, Change of meaning

1. はじめに

仏教の言語文化は古くからインドを起源とし、中国や朝鮮を経由し、中国で漢字と発音によって翻訳されて日本に伝来したものであり、日本に大きな影響を与えた。角岡は、仏教用語は仏教・漢語という二つの要素が相俟って渾然一体となり、現代に至るまで日本思想体系の根幹の一部を形成し、仏教の影響を除いての生活が考えられないほど不可欠となっていることを指摘した（角岡 2003：18）。しかし、現代日本語では、仏教に由来する漢語は本来の意味から逸脱して一般語に転用されるものが数多く存在する。例えば、「玄関」は、元は微妙なる道理の入口をいう仏教的意味で使用されたが、現在、住居の出入口を称する言葉として用いられる[1]。このような意味を変えている仏教用語が明確に把握でき、適切に使用するために、言葉の意味変遷についての考察や究明することは重要であると考える。

従来の仏教に由来する漢語の受容に関する先行研究では、例えば、片山（1970）は、「檀那」が「布施」や「施主」という仏教的意味から「主人」の意味へと定着し、さらに尊敬の意味でも使用されるようになった日常語化への変遷過程を明らかにした。佐藤（1971）は、中世における仏教漢語の「誕生」は、仏典では仏や菩薩の降誕を示すために使用されたことを指摘し、日本の平安や鎌倉時代には身分の高い者にも用いられたことを確認した[2]。横川（1997）は、キリシタンと狂言の資料を用い、「迷惑」が元の「道理に迷うこと」という意味を離れ、室町時代末期には「戸惑うや面白くない、申し訳ない」という一般的な意味でよく用いられるようになったことを明らかにした[3]。

これらの研究では、仏教語彙の意味的変化には多く言及されているが、用例を僅かに挙げて調査が行われただけで、システマチックな分析が欠けていると考える。

そして、仏教語彙本来の意味と一般化した意味との関係を明らかにするため、森は、語彙の意味の変化の仕方によって、仏教語彙本来の語義と一般に通用している語義とのかかわりを下記の三種類に分類している。

㈠仏教語が国語としてそのまま採り入れられている場合。
㈡もともと仏教に起源を有しながら、国語としては意味が全く変化している場合。
㈢たまたま同一の表記であるが、両者の詞には全く何の関係もない場合。

（森 1991：1）

そして、特定の語彙が、本来の意味から逸脱して一般に流用されたという基準を設け、大谷大学が編集した『仏教が生んだ日本語』に所収された 152 語のうち、意味の変遷を経ている 142 語が、意味のみ変化（105 語）、意味＋読み方（31 語）、その他（5 語、語源、禅語、短縮、非仏教用語である）、読み（1 語）という四つに分けられる（角岡 2003）。

これらの研究によれば、仏教語彙と一般語の関係について、語の表記が同一であっても、その仏教的意味と一般に通用される意味が全く異なるケースが多く存在することがわかる。この点を無視せずに検討することが重要であり、語彙の分類には語の読みの変化も考慮される。

また、田島は、仏教由来の漢語が、表記や読みも変わってしまうことは、日本で漢訳された仏教用語をそのまま使用した既存の語の借用と、原義から離れ、新たな意味や訳語が生じる新造があるからであることを提示した（田島 2012：58）。このため、意味変遷を考察する際、表記や読みが異なる仏教用語について、そのかかわりや相違を検討すべきである。

しかしながら、例えば、漢語の表記について、胡（2020）では、「執著」の表記には、「執著」と「執着」の二つがあり、玄奘の漢訳経典によると、「執着」は単なる書き間違いではないかと指摘されているが、現代では一般に「執着」という表記が用いられ、仏教語彙としての「執著」と同一の語であるかどうかについては、胡（2020）では十分な説明がなされていない。

それに対して、仏教語彙と一般語として表記が同一である「差別」と「平等」について、胡（2018）では、近代におけるこの 2 語の読み方の変遷について辞典の記述[4]が参照されている。しかし、辞書におけるそれぞれの読みに応じて異

なる意味が掲載されていることがある[5]。これは呉音の読み方から変化した同一の語である場合もあり、あるいは仏教語彙と一般語が偶然同じ表記で相関しない場合も考えられる。言葉の読みの相違による意味の違いには胡（2018）では言及されていない。

さらに、富永（1745）は『出定後語』の第十一章「言有三物」において同じ読みで地獄を意味する仏教用語が、「那落」・「捺落」と表記されることを論じた[6]。一方、中国で書かれた文献を根拠に、この二つの表記が読みは同じであるが、サンスクリット原語が異なる（nāraka と naraka の長短音の違い）ことを、同じく江戸時代の慧海潮音が指摘していることが明確となった[7]。

このような語の表記の相違について、例えば、「檀那」の表記は、古くは「檀那」、近世以降は「旦那」とされることが多いと示されている（『仏教が生んだ日本語』2001：141）が、この二つの表記の違いによる関連性と意味の使い分けについてはまだ触れていない。筆者は「檀那」と「旦那」の二つの表記が『新編日本古典文学全集』JKlib におけるそれぞれの意味合いや使用状況について別紙で調査を行った[8]。

ここまでに示した一連の研究により、表記や読みが複数存在する仏教由来の漢語を同一の語であるかどうかを認定するためには、それぞれの表記や読みについて個別に研究や考察を行う必要があることが分かる。

本論では、『日本国語大辞典』（第二版）から「仏語」と表記されている二字漢語を網羅的かつ体系的に収集し、「表記」、「読み」、「意味」によって収集語を見極めた上で、「表記もよみも意味も同じである場合」、「表記が同じで、よみと意味が異なる場合」、「表記もよみも同じで、意味が異なる場合」という三つのグループに分類した[9]。その中で、「表記とよみも同じで、意味が異なる」語を研究対象語とする。研究対象語の「世界」、「内証」、「精進」、「観念」、「方便」、「結縁」、「因縁」、「所詮」の八つの語に焦点を当てた。この八つの語を選んだ理由は、データ資料による使用例総度数が全て 50 例以上あるからである。そして、JKLib における『新編日本古典文学全集』のデータ資料を用い、通時的かつ計量的に調査語の意味の使用状況について考察を行うことで、時代の推移に伴う語の意味的変化を明らかにしたい。

2. データ資料と分析方法

『新編日本古典文学全集』（下にデータ資料と称す）[10] において、各語の総度数[11] を下記のように多い順に並べる〈「語形」（総度数）〉。そして、検索した資料の詳細を表 1 にまとめる。

「世界」（234）、「内証」（230）、「精進」（130）、「観念」（61）、「方便」（54）、「結縁」（52）、「因縁」（50）、「所詮」（50）

データ資料は、明記される作品の時代分けを基に、中古（平安時代）、中世（鎌倉時代と室町時代）、近世（江戸時代）に分類される。その中で、江戸時代においては、研究者によってその区分は異なることがあり、様々な定義が存在する。享保から寛政の改革を境に、享保までを前期（1715 まで）、享保から寛政までを中期（1716-1800）、寛政以降を後期（1801-1867）とする三分法の提案（中野 1985：5-6、47）や、文化庁が指定する「前近代日本史時代区分表」には前期（1603-1680）、中期（1681-1780）、後期（1781-1867）の分類[12] がある。これらの先行研究による区分及びデータ資料での時代分けを参考にした上で、本論では、江戸時代の資料を江戸前期から中期まで（1603-1780）と江戸後期（1781-1867）に分けた。

そして、各時代における意味の使用頻度を算出することで、データの分析を行う。長編作品や構成語数が多い作品である場合、語数も圧倒的に多い。その際、単位を揃えて単語何語あたりの頻度を求めた上で比較をする必要がある。その中で、総度数を「粗頻度」と呼び、このような単位あたりの語数を、粗頻度に対して「相対頻度」と呼ぶ（間淵 2022）。ただし、データ資料の総語数が特定されていないため、相対頻度を算出することができない。このような場合には、調査語の仏教的意味と一般的な意味を示す使用頻度を資料毎に捉え、意味の時代的な変化を総合的に検討する。

表1　検索した資料（成立年）、時代、ジャンル別

時代	ジャンル	資料名（成立年）	
中古（平安）	歌集	古今和歌集（913）、和漢朗詠集（1017 ～ 21）	
	物語	竹取物語（9 世紀末）、大和物語（951）、うつほ物語（969 ～ 1011）、落窪物語（10 世紀末）、源氏物語（1001 ～ 10）、浜松中納言物語（1062）、夜の寝覚（1045 ～ 68）、狭衣物語（1077 ～ 81）、栄花物語（正 1028 ～ 34、続 1092 ～ 1107）、大鏡（1086 ～ 1123）、とりかへばや物語（平安後期）	
	随筆	枕草子（1001）	
	軍記	将門記（940）、陸奥話記（1162）	
	日記・紀行	土佐日記（935）、蜻蛉日記（974）、和泉式部日記（1009 年）、更級日記（1060）	
	歌謡	梁塵秘抄（12C 後期）	
	漢詩	日本漢詩集（本朝無題詩「夏日禅房言志」（平安 1162 ～ 64））	
中世（鎌倉と室町）	歌集	新古今和歌集（1205）、中世和歌集（鎌倉～江戸前期）	
	物語	住吉物語（1221）、室町物語草子集（南北朝初～江戸初）	
	軍記	曽我物語（鎌倉末～南北朝）、義経記（室町初）	
	連歌・俳諧	連歌集（南北朝～室町末）	
	説話	宇治拾遺物語（1213 ～ 21）（世俗説話と民間伝承）、十訓抄（1252）	
	日記・紀行	とはずがたり（1306 ～ 13）（前編）、中世日記紀行集（鎌倉～安土桃山）	
	文芸評論	歌論集〔毎月抄（鎌倉 1219）、詠歌大概（鎌倉 1221）〕、連歌論集（南北朝～室町）、能楽論集（室町）	
	歌謡	閑吟集（1518）	
	能狂言	謡曲集（南北朝～室町末）、狂言集（室町）	
近世（江戸）	随筆	資料名（成立年）	時代分
		近世随想集（1633 ～ 1832）	前・中・後
	連歌・俳諧	俳諧集（蚊柱百句 1673）	前
		松尾芭蕉集（1687 ～ 1702）	中
		近世俳文集（1690 ～ 1801）	中・後
		川柳（1691、1757）	中
		近世俳句集（太祇句選 1772）	中
	浄瑠璃	近松門左衛門集（1685 ～ 1722）	中
		浄瑠璃集（1748 ～ 1780）	中
	文芸評論	俳論集（三冊子 1702、去来抄 1704）	中
	戯作	仮名草子集（1662 ～ 1677）	前
		井原西鶴集（1682 ～ 1696）	中
		浮世草子集（1703 ～ 1720）	中
		英草紙（1749）	中
		洒落本（1749 ～ 1798）	中・後
		雨月物語（1768）	中
		黄表紙（1784 ～ 1790）	後
		狂歌（花道つらね、才蔵 1787）	後
		東海道中膝栗毛（1802）	後
		滑稽本（1806、1811）	後
		春雨物語（1808）	後
		近世説美少年録（1829 ～ 1832）	後
		人情本（春告鳥 1836 ～ 1837）	後

（データ資料より作成）

3. データの分析

3. 1　辞書における意味用法

データ資料の使用例における調査語の仏教的意味と一般的な意味の記述は表2に示されている[13]。

表2　辞書における調査語の意味記述

語形	意味分け	辞書における意味記述
世界	仏教的意味	梵語 loka-dhātu の訳。衆生の住む所。須弥山を中心とした四大洲を一世界とし、三千大千世界によって全宇宙が構成されているとされる。それが一仏国土である。『岩波佛教辞典』（第二版）また、世は遷流の意、界は方位の意。世は、過去・現在・未来の時間。界は、十方（東西南北・四維・上下）の空間を意味する。『佛教語大辞典』（中村元）
	一般的な意味	①人間社会の全体。人が生活する地域。世間。世の中。 ②あたり一帯。そこらじゅう。 ③自分が属している既知の地域、それ以外の未知の地域などと分けた場合。 ④地球上のすべてのひろがり。特に、諸国家の集合体。万国。地球。 ⑤遊興の行なわれる場。また、その遊興 ⑥同一種類のものの集まり。職業、世代、専門分野などで、ある種の共通点をもつ人が形成する社会。また、共通性をもつ動物が形成する社会。 ⑦自分が得意とする分野。自由にふるまえる範囲。 ⑧歌舞伎・浄瑠璃で、戯曲の背景となる特定の時代・所・人物群の類型。
精進	仏教的意味	①梵語 vīrya の訳。物事に精魂を込めて、ひたすら仏道修行にはげむこと。『佛教語大辞典』（中村元）、『例文仏教語大辞典』 ②俗縁を断って潔斎し、仏門に入って宗教的な生活を送ること。『佛教語大辞典』（中村元）
	一般的な意味	①転じて、一定期間、言語・行為・飲食を制限し、身をきよめて不浄を避けること。 ②一般に、魚や肉類を食べないで菜食すること。また、その料理。 ③品行をよくすること。女色をつつしむこと。
観念	仏教的意味	観想すること。念想。真理または仏・浄土などに心を集中して観察思念すること。仏・菩薩のすがたを心に思い浮かべて念ずること。『佛教語大辞典』（中村元）
	一般的な意味	①転じて一般に、物事を深く考えること。 ②覚悟すること。 ③あきらめること
方便	仏教的意味	梵　upāya の訳。優れた教化方法（s:upāya-kauśalya の訳語）としても用いられる。真実に裏付けられ、また真実の世界へ導くてだて。衆生利益のための手段。差別の事象を知って衆生を済度する智慧。育み。真実の教えに導くために仮に設けた法門のこと。『佛教語大辞典』（中村元）
	一般的な意味	目的のために利用される一時の手段。また、その手段を用いること。
結縁	仏教的意味	仏道に入る縁を結ぶこと。仏法との関係を結んで、未来に成仏するためのきっかけを作ること。『佛教語大辞典』（中村元）、『岩波佛教辞典』（第二版）
	一般的な意味	①大事なもの、貴重な文物に接する機会を得ること。 ②慈善の行いをする寄進をすること。
因縁	仏教的意味	①梵語 hetu-pratyaya の訳。因は結果を招くべき直接の原因、縁は因を助けて結果生ぜしめる間接の原因。原因と条件。何らかの意味の原因を全て含めていう。つまり因縁によって生じている。『佛教語大辞典』（中村元）、『岩波佛教辞典』（第二版） ②十二因縁の系列における条件づけの関係。『佛教語大辞典』（中村元） ③仏と結縁させるもの。仏道修行を励ますもの。『例文仏教語大辞典』
	一般的な意味	①来歴。由来。いわれ。 ②運命や宿命によるゆかり。 ③転じて何らかのつながりを有すること。 ④原因。理由。わけ。
内証	一般的な意味	①表向きにしないで内々にしておくこと。 ②表向きではない場所。また、内々の人。
所詮	一般的な意味	①（副）詮ずるところ。つまるところ。要するに。結局。 ②（副）どのようにしても。どうせ。到底。 ③（名）結果として落ち着くところ。

（『日本国語大辞典』（第二版）と仏教系辞書[14]を参照して作成）

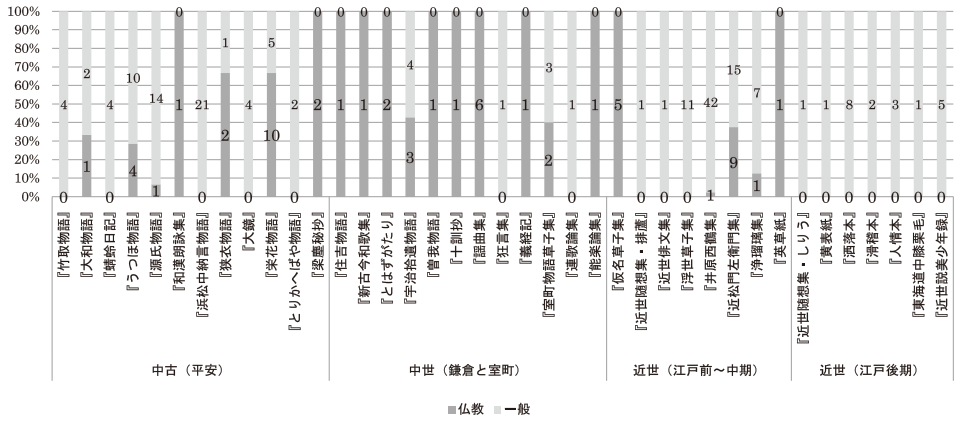
3. 2　意味の分布状況と傾向

各資料において意味の使用頻度（横軸）と占める比率（縦軸）を示したグラフ（1 ～ 8）では、意味の分布状況や使用傾向をより明瞭に観察できるように、各語の仏教的意味と一般的な意味の各子意味の使用頻度を統合し、「仏教」と「一般」とを略して示す。例えば、グラフ 1「世界」では、『源氏物語』における「仏教」の使用頻度と比率が 1（6.7%）であるのに対し、「一般」の使用頻度と比率が 14（93.3%）を占めていることがわかる。次に、使用された意味の分布や傾向について語ごとに説明していく。

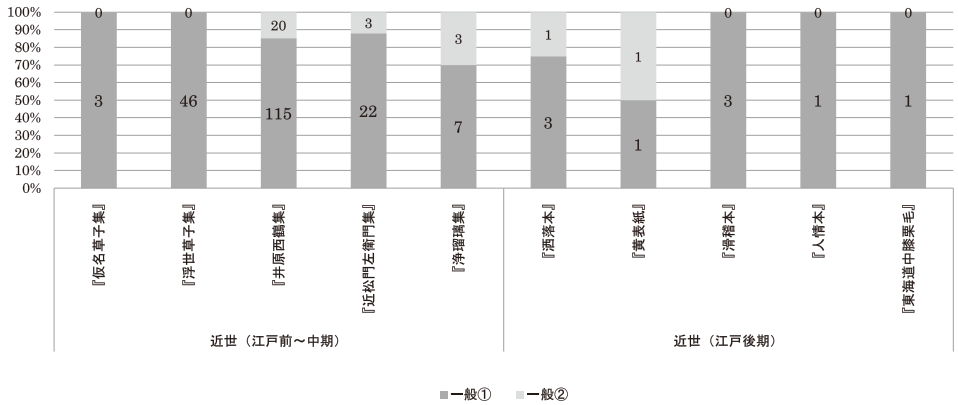
「世界」

グラフ 1 によれば、資料が豊富な平安時代では、「世界」は「三千大千世界」という仏教的意味が使用されつつ、使用例⑴と⑵に示された「人間社会の全体」と、「自分が属している既知の地域以外の未知の地域」という一般的な意味も多くの資料で用いられたことが見られる。中世の資料では仏教的意味の使用頻度が最も多くなった。江戸時代になると、主に一般的な意味が使用され、特に使用例⑶と⑷に示されているように、江戸時代後期には歌舞伎や浄瑠璃の戯曲に関連する特定の類型や遊興場での用法も確認された。

⑴いづれの世界にか、男とあるがあしこいはぬがなかりし。（一般的な意味①）
　『うつほ物語』内侍のかみ（2）〔一〕p.162
⑵さる東国の方の遥かなる世界に埋もれて年経ければにや。（一般的な意味③）



グラフ 1 「世界」の意味分布



グラフ 2 「内証」の意味分布

『源氏物語』東屋（6）〔三〕p.19

⑶このぢう旦那がもってきておきいしたから、読んで見いしたが、すっぱり松葉屋ノ世界さ。（一般的な意味⑤）

『洒落本』古契三娼 p.94

⑷一部の世界不立、看官も又拠あらざれば、飽ぬ心地すなればなり。（一般的な意味⑧）

『近世説美少年録』（3）第三版　巻十一 p.23

「内証」[15]

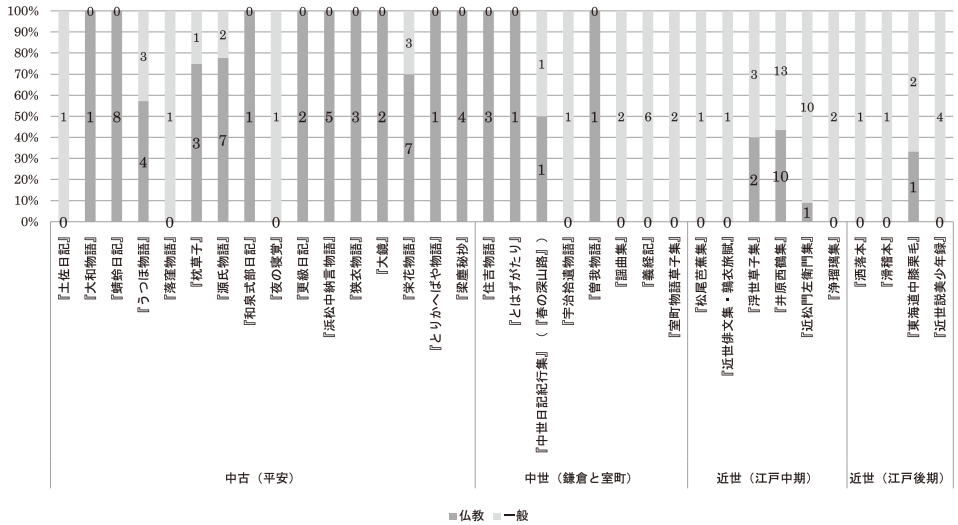
グラフ２によれば、「内証」を含む使用例が全て近世の資料に集中している。その中で、使用例⑸において「表向きにしないで内々にしておくこと」という一般的な意味①が、総頻度の約９割を占め、近世では主導的であったことが示されている。一方、「表向きではない場所やその人」という一般的な意味②がこの時代において極めて少ない使用頻度を示し、あまり使用されていなかったと考えられる。

⑸内証は挑灯程な火がふって、大晦日の空おそろしく（一般的な意味①）

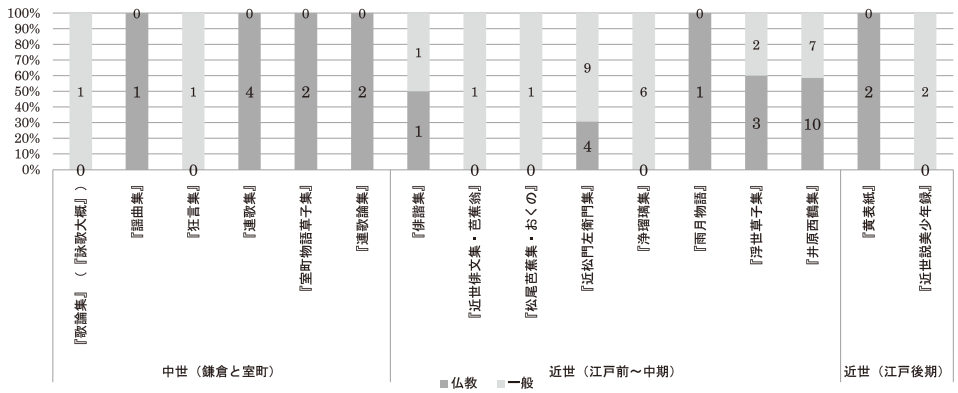
『井原西鶴集』好色一代男（1）巻三 p.86

「精進」

中古の資料では、「精進」は仏教的意味を示す使用頻度が多く見られ、特に使用例⑹における仏教的意味②が頻繁に使用された。中世に入ると、その頻度が減少し、転じて「一定期間、言語や行為、飲食などを制限し、身をきよめて不浄を避け



グラフ３「精進」の意味分布



グラフ４「観念」の意味分布

ること」という一般的な意味①が資料では顕著に用いられていた。近世になると、この意味が主導的になっていたことが確認された。

⑹その前の五月雨の二十余日のほど、物忌もあり、長き精進も始めたる人、山寺にこもれり。（仏教的意味②）

『蜻蛉日記』中〔四〕p.173

⑺我らは今朝他所へ参り、大事の精進をつい落馬いたした。（一般的な意味①）

『近松門左衛門集』（2）上〔四〕p.594

「観念」

グラフ４によれば、使用例⑻と⑼に示された「仏や浄土などに心を集中して観察思念すること」という仏教的意味が主に中世や、近世の一部の資料でも使用されたことがわかる。近世になると、一般的な意味を示す使用頻度が目立つようになり、主に使用例⑽と⑾において「覚悟すること」と「あきらめること」という一般的な意味を示す頻度が多くなっている。

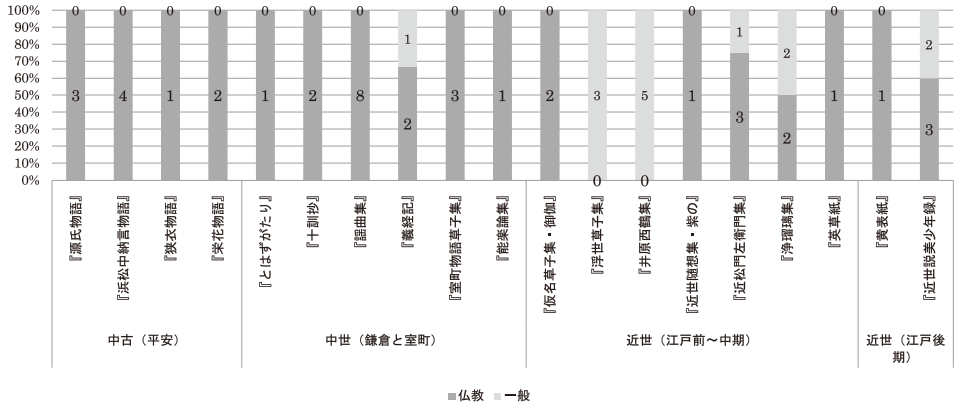
⑻はかなき世にくらべば、朝霞も長閑なるべし。観念の様也、是又地連哥也。（仏教的意味）

『連歌集』湯山三吟百韻
何人〔40 古注 1〕p.120

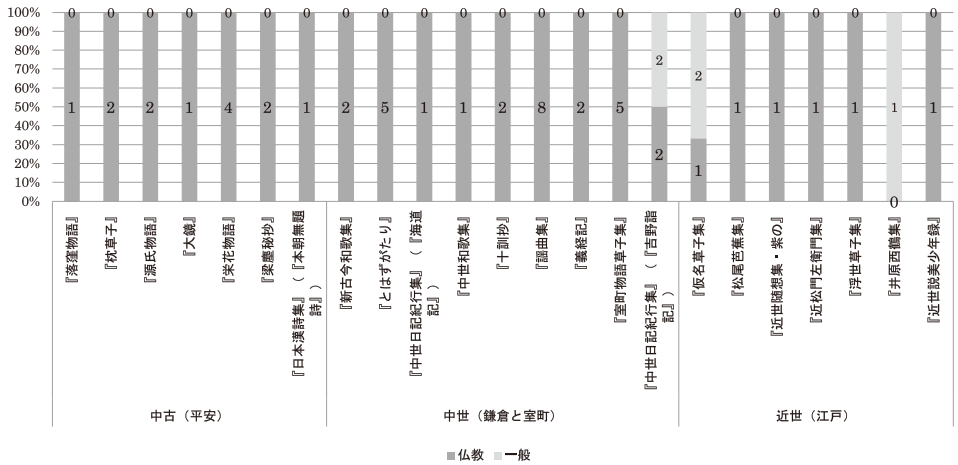
⑼ただ願ふべきは、後世の一大事と、観念の窓に閉ぢこもり。（仏教的意味）

『井原西鶴集』新可笑記（4）巻四　四 p.588

⑽これ一生の孝行納めと観念し（一般的な意味②）



グラフ５「方便」の意味分布



グラフ６「結縁」の意味分布

『近松門左衛門集』生玉心中（2）
中之巻〔十二〕p.366

⑾不義はお家のきつい御法度、姫君とても是非がない、観念せよと言ふ声の（一般的な意味③）

『浄瑠璃集』碁太平記白石噺
第三〔一八〕p.497

「方便」と「結縁」

この２語に関しては、グラフ５と６では意味分布の様相が類似している。一般に、中古と中世の時代では、主に仏教的意味が用いられていたことが共通してみられ、その後、仏教的意味が使用されつつも、江戸時代においては一般的な意味の使用も注目される。ただし、一般的な意味が僅かに用いられ、示す使用頻度も極めて少ないため、多くの資料では依然として仏教的意味が主導的であったことが見受けられる。

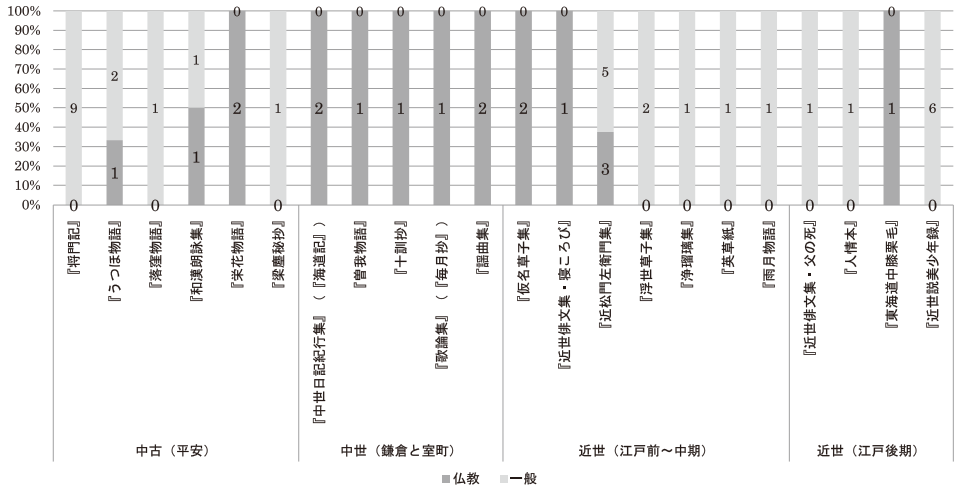
「因縁」

グラフ７では、該当語は仏教的意味が集中して用いられていたのは中世であったことが見られる一方、中古と近世時代では、一般用法を示す頻度が多く占めていることが明らかに観察できた。その中で、使用例⑿と⒀に示された「運命や宿命によるゆかり」という一般的な意味②がよく用いられた。

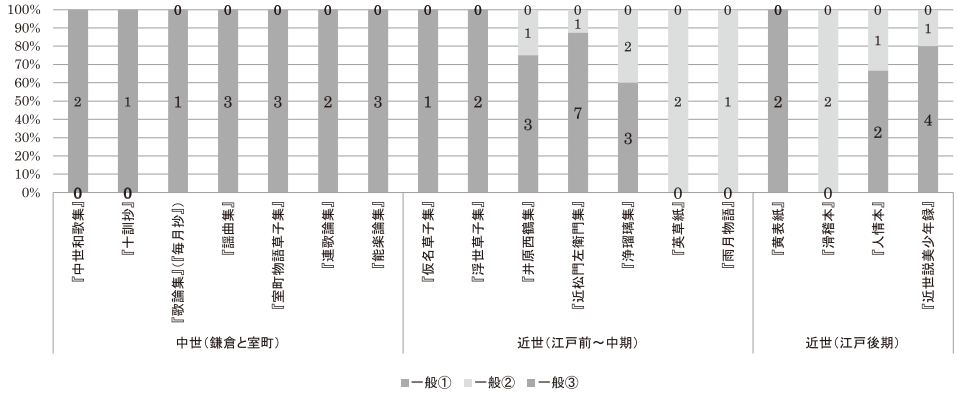
⑿本意ありて、因縁とものしたまはむ人、同じところにて見語らひたてまつらむ、とておはしまさせしを（一般的な意味②）

『うつほ物語』国譲　上（3）〔三九〕p.124

⒀また是前世の因縁か、自然ともつれよる糸の



グラフ７「因縁」の意味分布



グラフ８「所詮」の意味分布

結れかかる其風情（一般的な意味②）
『人情本』春告鳥　巻之十五　p.584

「所詮」

グラフ８では、「所詮」は全て一般的な意味へ転用され、特に使用例⑭に示された「詮ずるところ」という副詞としての一般的な意味①が優勢であったことがみられる。使用例⑮に示された「結果として落ち着くところ」という名詞としての一般的な意味③が、鎌倉時代に成立した『中世和歌集』と『十訓抄』のみに使用され、「どのようにしても」という副詞としての一般的な意味②が主に近世以降に用いられはじめたことがわかった。

⑭所詮命を全くして平氏の怨敵、右大将頼朝を一太刀恨み（一般的な意味①）
『近松門左衛門集』出世景清（3）第一〔一〕p.15

⑮むつかしくかくいひての所詮は、と云ふべきか。（一般的な意味③）
『中世和歌集』正徹物語〔5〕p.421

以上、語ごとと資料ごとに意味を示す使用頻度の分布状況によって、時代の推移とともに、データ資料では、仏教的意味から一般的な意味への変化が明確に観察できる語群には、「精進」、「観念」、「内証」、「所詮」、「世界」、「因縁」が含まれる。その中で、「内証」と「所詮」には一般用法しか見られない。一般用法への移行が認められない語群には「方便」と「結縁」が含まれる。

3. 3　近世における意味の使用状況

データの分析から、調査語は一般的な意味へ流用される傾向が特に江戸時代に顕著であったことが見られる。したがって、近世の資料で調査語が頻繁に使用された意味を表３にまとめる[16]。表３によれば、江戸時代の両時期では調査語が優勢となった意味が同一であることが確認された。

一方、室町時代で日本語の使用様相を示す『日葡辞書』[17]にて掲載されるものを参照した結果、この時代に主に使用された意味（表３）と一致している語には、「世界」、「内証」、「精進」、「方便」、「結縁」がある[18]。少なくとも近世直前の時代でもこれらの意味用法が使用されていた可能性が考えられる。

表３　近世の資料による調査語が頻繁に使用された意味

	近世前～中期	近世後期
世界	一般①	一般①
内証	一般①	一般①
精進	一般①	一般①
観念	一般②	
方便	仏教	
結縁	仏教	
因縁	一般②	一般②
所詮	一般①	一般①

（データ資料による各意味の使用頻度に基づいて作成）

4. おわりに

本論では、『日本国語大辞典』（第二版）を利用して網羅的に収集した二字仏教漢語の用例の中で、対象語として「表記も読みも同じで意味が異なる」での８語に焦点を当て、日本古典文学データ資料における各語の意味の使用状況と経年変化について計量的手法で調査を行った。その結果、以下のことが明らかになった。

時代の推移に伴い、データ資料では「方便」と「結縁」が主に仏教的意味で使用され続ける一方、他の語については一般的な意味への移行が明確に観察された。特に、調査語が江戸時代において一般的な意味が際立って使用されていた。これは、江戸時代には、文学や演劇が盛んであり、社会や文化の変化が著しく、新たな価値観や思想が生まれたため、仏教用語が頻繁に文学作品や日常会話などにも取り入れられ、一般的な意味で使用されるようになったからであると考えられる。なお、江戸時代の両時期でも語が同じ意味で頻繁に使用されていたことが確認されており、その中に五つの語が『日葡辞書』における意味とは一致している。これらの意味は近世直前の時代でも流行していた可能性が考えられる。本論では使用例が少ない語について、十分に検証できなかった部分がある。この結果をふまえつつ、使用例をさらに充実

させて検討を進めるとともに、今後、近世以降の資料による考察結果と組み合わせ、研究対象語の意味変遷について総合的に評価したい。

注

1) 『日本国語大辞典』（第二版）に参照。
2) 一方で、禅宗で用いられた「相看」、「活計」、「情識」は、元の意味から転じて一般的な意味が一時的に用いられ、後には忘れられてしまったことも指摘されている（佐藤 1971）。
3) 室町時代末期によく用いられていた「戸惑うや面白くない、申し訳ない」という一般的な意味が現代的な意味に繋がっている可能性も示唆されている（横川 1997）。
4) 『明治のことば辞典』（1986）によれば、「平等」の読み方は「ヘイトウ」、「ビョウトウ」、「ビョウドウ」の三通りの発音が記されている。明治初期から、特に「ヘイトウ」と「ビョウドウ」の並存が長く続いていたようである。差別が幕末・明治期において仏教由来の読み「シャベツ」から漢音読み「サベツ」へ変えるようになったのは当時の流れであることが提示された（胡 2018）。
5) この 2 語の仏教語彙と一般語としての表記が同一であるが、『日本国語大辞典』（第二版）においては、「平等」は「びょうどう」や「へいとう」と呼ばれ、「差別」は「さべつ」や「しゃべつ」と呼ばれる。言葉はそれぞれの読みに応じて異なる意味が掲載される。「平等」〔名〕〔形動〕びょうどう：(1) 平らかにひとしいこと。でこぼこがなくそろっているさま。(2) かたよることなくひとしいこと。ひろく行きわたって差別がないこと。一様に扱うこと。また、そのさま。へいとう。(3) 心を平らかにして乱れないさま。へいとう：差別なくひとしいこと。また、そのさま。平頭。びょうどう。「差別」〔名〕さべつ：(1)けじめをつけること。差をつけて区別すること。ちがい。分別。しゃべち。しゃべつ。(2)とくに現代において、あるものを、正当な理由なしに、他よりも低く扱うこと。しゃべつ：(1)仏語。万物の本体の、一如平等であるのに対し、その万物における高下、善悪などの特殊相のこと。(2)区別をすること。けじめをつけること。また分別があること。さべつ。
6) 吉川延太郎（1996）『註解出定後語』「言に三物あり第十一」pp.176~177，P185.
7) 妻木直良（1913）『真宗全書護法部』（対外篇）「掴裂邪網編」巻上 P524.
8) 調査の結果、「檀那」と「旦那」はどちらも仏教用語としての歴史を持ちながらも、意味の変遷が起こったのは「旦那」となり、単に「檀那」という表記で調査が行われることは不十分であり、「檀那」が「旦那」とは同一語と見做されるわけでもないと考える。
9) 『日本国語大辞典第二版』（JKLib）において「仏語」と標記されている二字漢語の用例計 3307 語が網羅的に収集された。表記が同一となることを前提として、二つ以上の表記が存在する語（全部 190 語）を排除した。
10) ジャパンナレッジ（JKLib）における『新編日本古典文学全集』（小学館）では、記紀・萬葉などの古代文学から、近松・西鶴などの近世文学まで、名作全 88 巻がある。本論では、使用例が極めて少ない上代の資料（計 3 巻）と、語が仏教的意味のみで用いられる仏教説話や随筆、法語集などの資料（計 15 巻）を除いて利用した。
11) 総度数には現代語訳や解釈文、固有名詞（地名、人名、専門用語）、見出しのみに含む使用例は含まれていない。
12) 文化庁重要文化指定目録の基準によるものである periodization.pdf (u-tokyo.ac.jp)。
13) 表 2 ではデータ資料で出現する語の意味のみを示している。その中で、「内証」と「所詮」の仏教的意味を示す使用例は検索されなかった。
14) 日本で代表的な仏教系辞書 6 部（『望月佛教大辞典』、『仏教大辞彙』、『織田佛教大辞典』、『佛教語大辞典』（中村元）、『例文仏教語大辞典』、『岩波佛教辞典』（第二版））のうち、調査語がすべて掲載されている『佛教語大辞典』（中村元）、『例文仏教語大辞典』、『岩波佛教辞典』（第二版）の 3 部を基に利用した。
15) 『日本国語大辞典』（第二版）における「内証」の一般的な意味①と②には、それぞれ複数の意味が含まれる。本論では、紙幅の制約のため、細別される意味の分布状況については詳細に展開しない。
16) 表 3 では、データの分析による調査語の近世の資料における子意味の使用頻度で計算したものを示す。また、「観念」の近世後期の資料による使用頻度が極少ないため、近世前期の資料と合わせて統計する。
17) 1603 年に日本で刊行された『ポルトガル語の説明を付したる日本語辞書』の全訳本である。
18) 『日葡辞書』においては、「観念」と「所詮」は掲載されておらず、「因縁」は、「Inyen インネン起源、あるいは、原因。」という意味が示される。

参考文献

〈文献〉

大谷大学編（2001）『仏教が生んだ日本語』東京：毎日新聞社.
片山晴賢（1970）「仏教語彙の日常語化への変遷過程－

檀那の場合－」『駒沢国文』(8)，26-36.
角岡賢一（2003）「一般語彙として流通する仏教用語の考察」『龍谷紀要』25 (1)，17-35.
胡新祥（2018）「中日近代新漢語についての研究－仏教由来漢語を中心に－」立教大学博士（文学）甲第469号．doi/10.14992/00015904
胡新祥（2020）「仏教由来漢語「執着」についての考察」『立教大学日本語研究』26，23-36.
佐藤喜代治（1971）「中世の漢語についての一考察」『国語学』84，1-10.
田島優（2012）「仏教語における音写語の文字論的・語彙論的研究序説」『文芸研究 : 文芸・言語・思想 』173，48-58.
妻木直良（1913）『真宗全書護法部』（対外篇）「掴裂邪網編」金剛索，潮音著，巻上．京都 : 藏經書院 .
中野三敏（1985）『江戸名物評判記案内』岩波書店.
間淵洋子（2018）「近代漢語における表記・語法の多様性とその変化に関する計量的研究－現代語確立期にみる言語変化の様相と背景－」明治大学博士 32682 甲 第 898 号．http://hdl.handle.net/10291/19555
間淵洋子（2022）「解説 :「言語統計学入門」(6) 出現数が多い／少ないとは」『計量国語学』(33) 6，404-414.
森章司（1991）『国語のなかの仏教語辞典』東京 : 東京堂.
山崎誠（2022）「語の頻度列からみた古典作品の計量的分析－日本語歴史コーパスを利用して－」『中部日本・日本語学研究論集』研究叢書 542，351-366.
横川澄枝（1997）「迷惑の意味の変遷についての一考察」『言語文化と日本語教育』14，52-64.
吉川延太郎（1996）『註解出定後語』（富永仲基原著）「言に三物あり　第十一」東京 : 大空社 .

〈辞書〉

石田瑞麿（1997）『例文仏教語大辞典』小学館．https://japanknowledge.com/contents/bukkyo/
織田得能（1969）『織田佛教大辞典』大蔵出版株式会社．（1917 年初版）
土井忠生　森田武　長南実編訳（1980）『邦訳日葡辞書』岩波書店.
中村元　福永光司 他（2002）『岩波仏教辞典』（第二版）岩波書店．（1989 年第一版）
中村元（1975）『佛教語大辞典』東京書籍株式会社.
『日本国語大辞典第二版』（2000）小学館．https://japanknowledge.com/contents/nikkoku/
望月信亨、塚本善隆（1954）『望月仏教大辞典』増訂版．世界聖典刊行協会．（1933 年初版）
龍谷大学編纂（1972）『仏教大辞彙』富谷房．（1914 年初版）

〈資料〉

『新編日本古典文学全集』小学館．https://japanknowledge.com/contents/koten/